ハラスメント防止

「やまなし随想」120728

「ハラスメント防止」と記入してネット検索をしてみると出るは出るは。各種団体や組織のハラスメント防止対策を容易に閲覧することができる。世はかくのごとくハラスメント、つまり大人や子供の「いじめ」が横行している証左だ。

オオカミやライオンのように、一撃で相手に致命的な損傷を与える物騒な肉食獣は、空腹時に同胞との間で死闘を繰り返すことになると種族そのものが消えてしまう危険をはらんでいる。それを避けるために、同一種の間に限って通用する攻撃意欲を減殺させるプロトコルを共有している。

オオカミなどでは、仲間同士で争ったとき、勝敗が鮮明になると弱者は自分の最も致命的な部分である喉や腹を強者に露出させて恭順の意を表す。その瞬間に強者の攻撃意欲は減殺されてしまうのである。（K・ローレンツ（日高・久保訳）『攻撃』みすず書房）

オオカミの末裔である飼い犬が悪事を、飼い主に一喝されるとゴロンとひっくり返ってあられもない姿を見せる。主人の攻撃を避ける服従のサインである。

他方、草食動物には一撃で相手を倒す武器の持ち合わせがない。そのため攻撃を収める本能も必要ない。格好の例がニワトリで、狭いケージでアツガイをすると必ず犠牲者が出る。弱そうな一羽を選んでみんなでとさかを突っつく。一羽一羽の攻撃は弱く致命的ではないが、間断ないピッキングによってついに出血多量で死に至る。しかるにこれを回避する集団的サインをニワトリ社会は共有していない。この場合、ケージが狭くなったり、与えられる餌が少なくなったりするとこのピッキングが頻発するようになる。

いまこの国では、所得が目減りしたり、自由に動ける心理的空間が狭くなったり、つまり人間ケージ全体が狭まっている。ニワトリと同じ攻撃を回避するサインを共有しないヒト族の欠点が露呈する。ハラスメント防止キャンペーンのとかくの盛況は哀しいヒトの性。本能に持ち合わせがないならヒト科ヒト族一流の脳力をもってこれを防ぐ知恵を探さねばならぬ。